

問題解決の遺伝子

50歳を過ぎたころから若い頃に受けたアドバイスを思い出すことが増えてきました。友人にこの話をすると自分もそうだと言う人が少なくありません。ノスタルジーかもしれませんが、理由があるようにも思われます。新人時代は誰でも目の前の仕事に追われて、がむしゃらに取り組んでいます。わからないこともわからないままにやっています。このような状態のときに先輩からアドバイスを受けても十分に理解できないのではないのでしょうか。

時を経て、実践を積み重ねるうちに、わからなかったことが少しずつわかってきます。疑問点も明確になります。すると脳細胞の奥にしまっていた過去のアドバイスに回線がつながり、突然思い出されるのではないかと思われます。ようやく先輩の域へ近づいたということかもしれません。

新採教員と指導にあたる教員の場合もこれに似ています。カウンセリング場面で、新採教員から出てくる発言を多い順に並べると以下ようになります。

1. 先生方からは「なんでも聞いて」と言われるが、わからないことがわからないので質問できない。
2. 特に一学期は毎日必死だったので、何をしていたのかを思い出せない。
3. 直ぐに感情的になる自分の性格が嫌になった。



まさに、目の前の仕事に追いかけてられている新採教員の姿が浮かんできます。

一方、指導にあたる教員にもいろいろなタイプの方がいます。新採の性格や心情を理解しようと努めている方と最低限これだけは身に付けて欲しいとの目標達成を前面に出す方もいます。前者は新採の長所を見つけることも上手な方が多いので、新採との「信頼関係」を作りやすいように思います。しかし、後者は何故目標が達成できないかの原因を探るため、どうしても新採の能力や短所等の資質面にも触れることになり、「緊張関係」が生じやすくなります。大半の新採は何年か先には必ず、指導内容を思い出してくれることを信じて、新採の個性を尊重し、寄り添った指導を優先することが大切ではないでしょうか。



次に新採から出てくる深刻な悩みに問題行動や保護者対応に対するかかわり方があります。例えば、盗みを繰り返す児童、暴言・暴力の多い中学生、保護者からの理不尽なクレーム等に対する対応です。これらはいくら研修を受けてもすぐに対応能力は身に付きません。実践を積み重ねるしかないのです。経験に基づく技量がものをいう分野です。

しかし、追体験は出来ます。各学校には必ず、これらの問題に対応できる実力を備え、修羅場をくぐってきたベテラン教員がいるはずで、生徒と徹底的にかかわった経験のある人だけが身に付けることが出来る本物の実力と言えます。本当に大事なことはマニュアル化できないので、先輩から後輩へと「問題解決の遺伝子」を伝承して欲しいと思います。

